アメリカ南北戰爭史研究の現代的意義について

菊　池　謙　一

I

アメリカ國民の心あるものは，一世紀まえの南北戰爭が，ほんとうの意味ではまだすっかり片ずいていないことを，しばしば痛感しているにちがいない。

たとえば，昨年9月，日本の新聞のアメリカ特派員からの通信は，次のように報じた。

「米國の首都ワシントンに去る 13 日，靜かな革命が成功し，建國以來の歴史に新たな榮光を添えた——新聞という新聞がそろって大仰な感傷をにじませて報じた。ところがそんなにもったいぶらねばならぬほどの大事件でもないのである。いままでにできていないことの方が不思議なくらいのものであった。公立小，中，高等學校は長い夏休みを終えて，去る 13 日から全國一齊に新學期の授業に入り，ワシントンではこの日を期して白人の生徒と黒人の生徒を同じ學校に入れる“革命”を行ったというのである」(「朝日新聞」1945 年9月 15 日，中村特派員發——傍點菊池)。

1954 年5月 17 日，アメリカの最高裁判所は，公立學校で白人と黒人を隔離していることを憲法に違反する，と判決した。世界の人民の民主主義と基本的人權のためのたたかいの高まりが，アメリカの最高裁に，自國の人種差別制度について默っていられなくしたのだ。その判決が9月 13 日に，實施の緒についたというわけである。アメリカの憲法は，すべての市民に平等の法律上の保護を與えねばならないとして，市民權や選擧權を人種や皮膚の色などによって差別して拒んだり制限したりすることを禁じている（憲法修正 14 條，15 條)。これらの憲法の條項は，奴隷制度と强制勞働を禁じた修正第 13 條とともに，直接に，南北戰爭によってアメリカ國民が闘いとったものであり，百萬のアメリカ人將兵の血の犧牲がささげられた民主主義革命の成果であったはずである。だから教育上の差別制度の廢止などは，「いままでにできていないことの方が不思議」なのである。それがいまアメリカで「革命」だといってさわがれているとしたら，あきらかに南北戰爭は片ずいてはいなかったわけである。

「“靜かな革命”とはいうものの騒ぎが全くなかったわけではない。黒人の轉入割當がわずか5名しかなかったある白人學校では附近の黒人の中に“不穩”の形勢がありというので警官と白バイが校門を守ったところもあった」(「朝日新聞」同上)。

『タイム』1954 年9月 20 日號によれば，ヴァージニア州のフォアスティッでは，アナベル初級學校の約 60 人の白人生徒の母親たちは 13 人の黒人兒童の入學に反對して，抗議のために自分の子供たちを學校へ出さず，校長の免職を要求し，テネシー州ナシュヴィルでは，フィスク大學の白人教授たちの3人の子供は，黒人のパール小學校に入學を招否され，テキサス州ハッチンズでは，4 人の黒人兒童は，州がもう1年白人黒人の差別制度をつずけるからというので，白人の小學校に入學できなかった。ミシシッピ州ジャックソンでは，州會は臨時會期であつまり，合衆國最高裁の判決を出しぬいて，3 分の 2 の票で最後の方法として公立學校をすべて廢止するなどの州憲法の修正を行った。「ミシシッピ州をつうじて，白人の實業家や農業家は，黒人の兒童を白人の學校へはいらせないように，地方“市民會（シティズンズ・カウンシル）”を組織しはじめた。」

『ニューズ・ウィーク』1954 年 10 月4日號には，デラウェア州ミルフォードで，この問題について「暴力沙汰のおそれ」があるとの口實で學校を閉鎖した事實が，報じられた。

その後，問題はくすぶりつずけ，『マンスリィ・レヴュウ』12 月號には，「南部の學校——人種差別主義はぬぐい去られるだろうか」と題して，「公立學校における人種隔離を違法とする最高裁の判決が，すべての南部人の心臟をゆりうごかし」ている實狀が，つたえられている。それによると，「その地方の經濟と地方および州の政治機關を支配している」差別制度擁護者たちは，「1，公立學校を“廢止”するか，それを辭句のぺてんで合衆國裁判所の範圍から除くか，できるように州法律を修正する，2，クー・クラックス・クラン（KKK）のような抑壓と經濟的壓迫とで，農村の黒人たちをおどしつける，3，都市の黒人居住區を嚴格に維持する」などの手段をとって，人種差別制度をのこし，强化しようとしている。たとえば，ケンタッキイ州ルィスヴィルで，白人地域にある家を黒人に賣ったために，ある白人夫妻が暴徒におそ

われ，家をダイナマイトで爆破され，警官に逮捕されて「人種闘爭をおこさせるための共產黨の陰謀」であるとして，州法廷で「治安法」によって 15 年間の投獄の判決をうけた。『ザ・ワーカー』紙 1954 年 12 月 26 日號によると，「南部の黑人隔離の學校制度の終末のはじまりは，それに反對する者も賛成するものもそれぞれに團結をつよめさせることになった。黑人たちは教育の平等のためにここまでかち得てきたものを保持しようとして決然と努力すれば，それにこたえるように，今やさまざまな〔白人の〕人種憎悪の組織がおこっている」。ミシシッピ州の“市民會（シティズンズ・カウンシル）”をはじめ，ジョージア州その他の“白人同胞會（ホワイト・ブラザフッド）”，デラウェアやボルチモアの“全國白人向上協會”，アトランタの“クリスチャン・反ユダヤ黨”，ジョージア州の“全國白色人種保存協會”，“全國白人多數者向上保護協會”，アラバマの“アメリカ州權協會”，“フロリダ州權協會”，等々が，KKK 的な人種主義組織として，さい近つくられ，動き出しているのだ。それらを背景として，去る 11 月の南部知事會議では，公立學校の差別制度を無期限に保つことに賛成の聲明に署名を拒んだのは 5 人しかいなかった。

以上のような事實は，現代のアメリカにおける黑人差別制度が，なかなか簡單には解決できないことを思わせる。アメリカ共產黨でさい近採擇された綱領は，指摘する，「もしわが國において，黑人人民にたいする壓迫がなかったとすれば，北部と南部の賃金差もなかったにちがいない。こうして南部の白人勞働者も，またその黑人の兄弟たちも，ともにもっと高い賃金をうけとり，一方，北部の勞働者たちは，職場閉鎖と南部のやすい勞働力の競爭をなくすことができ，こうして賃金水準は全國的に引き上げられたであろう。

もし黑人人民にたいする壓迫がなにもなかったとすれば，人頭税を主張するような議員はえらばれなかっただろう。人頭税をとなえる議員がいなかったならば，反動どもにとって，タフト・ハートレー法，スミス法，マッカラン法など諸立法を通過させることはもっと困難であったにちがいない。

もし人頭税を主張する南部民主黨（デイキシクラート）の議員がワシントンの議會にいなかったならば，もっと改善された社會保障法令や物價・家賃統制，教育にたいする連邦政府のより以上の援助，連邦政府による住宅建設計畫，失業者ならびに老年者にたいする補助金の增額，より公正な税法等をかちとるための機會は，もっとあったにちがいない。

こうして，アメリカ人民は恥ずべき黑人差別主義のために，つぐないをしているのである。このつぐないにさらに加えて，黑人人民の上につみかさねられた敵意と壓迫とがある。……

わが黨は，黑人勞働者，メキシコ人，プェルト・リコ人，インディアン，およびユダヤ人の勞働者にたいし，女子および青年勞働者にたいして加えられている雇用と就業の機會にかんするあらゆる形の差別待遇を一掃するために，全國的な運動をおしすすめることを主張する。……

わが黨はさらに，人頭税，リンチ，强制隔離，および黑人差別主義の廢止のために，連邦の市民權法を制定することを主張する。教育の機會均等，および完全な選擧・被選擧村は，北部南部をとわず，黑人人民にたいして保障さるべきである。」

こういう主張をもつ政黨は，昨年 8 月にアメリカ議會を通過した共產黨取締法によって，非合法化された。だが，黑人人民に平等の市民權を保障すべき連邦市民權法は，じつは直接に南北戰爭の課題であったはずであり，いや，本來は，基本的人權を世界にあきらかにしたアメリカ獨立宣言の保障するところだったはずである。

昨年，ヴァージニア州議會は，州の祭日が多すぎるから整理しようというので，獨立宣言の起草者トマス・ジェファソンの誕生日と，南北戰爭の南部叛逆軍のロバート・E・リー將軍の誕生日とのどちらかを祭日から除こうということになったとき，ただちにジェファソンの方を除くことにきまったそうだ（*Political Affairs*, July 1954, p. 10）。ヴァージニアだけでなく，アメリカ全體で支配階級は，獨立宣言や憲法の民主主義原理をふみにじり，ジェファソンや，「多數者が全くの暴力をもって少數者の明白な憲法上の權利を剝奪するなら，それは，道德的に，革命を正當化するだろう」と云ったリンカーンなどを忘れようと努め，奴隷解放の人道的戰士ジョン・ブラウンにたいする鎭壓者であり，南部の叛亂軍を指揮した奴隷所有階級の代表者のリーなどを國民の英雄にしたがっているのだ。

II

人間が皮膚の色や生れによって差別されるということは，いうまでもなく，基本的人權が尊重されていないことを意味する。基本的人權の尊重は，民主主義の根本條件であるはずだ。黑人差別制度が奴隷制度の時代から引きつずいて存在しつずけてきたアメリカ社會では，ブルジョア民主主義は完成していなかったのだ。いまやそのブルジョア民主主義のすべてが，帝國主義戰爭と世界支配をもくろむアメリカの支配階級によって危機に瀕せしめられているとき，黑人問題はとりわけ重大化している。

去る 12 月に，アメリカの黑人指導者ウィリアム・パ

ターソンは，その數ヵ月まえに寄附者の名簿を提出するのをこばんだとの理由で90日間投獄されたが，出獄してふたたび同じ理由でやはり90日間の投獄の判決をされた。「その告發はでっちあげ(フレイム・アップ)であった——おそらく法廷の歴史でもっとも亂暴なもっとも先例のない，基本的な市民的自由の侵犯であった」(*The Worker*, December 12, 1954, p. 10)。このパターソンは，市民權擁護會議の全國書記長であり，1951年8月に，國際連合にたいして，「合衆國の隔離され差別され長く暴力のまとにされてきた抑壓された黑人市民は，政府のすべての機關の，終始一貫した意識的な統一的な政策としてのジェノサイド（根だやし）をうけている」と訴えた黑人請願者たちの代表者であった。その有名な告發の書『我々はジェノサイドを告發する——黑人人民にたいする〔アメリカ〕政府の犯罪』のなかで，彼らはとくに次の點を强調した。「合衆國の黑人人民にたいするこのアメリカの犯罪がつずくことが，それらアメリカ人の反動的勢力を强くして，第三次大戰にかりたてる。」「我々はアメリカの白人至上主義者の〔黑人にたいする〕ジェノサイドの教義と行動とが，すでにアジアの有色人民にたいして巧みに用いられてきているのを，特別の恐怖をもって注目してきた。……國內での白人至上主義は，國外での有色人種にたいする殺戮になっている。どちらも，有色の皮膚をもつ人間の生命にたいする侮蔑をあらわす。朝鮮におけるナパーム爆彈と，アメリカ國內の私刑暴徒(リンチャー)の薪たばとは，どちらも〔人間を〕火で殺すということ以上に多く結びつきがある。私刑暴徒(リンチャー)と原爆使用者(アトム・ボンバー)とは血緣關係だ。前者が人殺しをして罰せられず非難もされないことは，後者を大いに激勵することになり，從って世界の平和と何百萬もの人間の生命が，危くされる。」國際連合が1948年に，「根だやし協約(ジェノサイド・コンヴェンション)」を採擇したのも，ヒットラーの戰爭犯罪の分析をつうじて，平時の國內における特定の人種にたいする迫害乃至「根だやし」政策が，不可避的に國外の他の民族にたいする大規模な「根だやし」戰爭に發展する，という結論にいたったからである。

本來，基本的人權が尊重されないということは，人間が尊重されないということである。だから黑人であれ何であれ，特定の人間が人間として認められない社會は，じつは人間一般が人間として尊重されない社會である。マッカーシィズムは，アメリカで黑人のみならずすべての人間の基本的人權がどんなにたやすくふみにじられるか，すべての良心がどんなに暴力的におびやかされるか，を示した。マッカーシィが勢力を失墜しても，ウィリアムソンをはじめ，スミス法で投獄されていたコミュニストたちが刑期をおえて出獄すると，すぐコミュニストであるというだけの理由でふたたび投獄されようとしている事實をみても，迫害されているのが黑人だけでないことが明かである。

アメリカ民主主義が危殆に瀕していることは，日本人にとってもきわめて重大なことだ。日本はアメリカの軍事基地であり，まだ被占領國である。自國の國民の民主主義をふみにじって恥じない帝國主義者が，どうしてその被占領國，從屬國の國民の民主主義や自由を尊重するだろうか。ましてや，黑人差別の白人至上主義が，從屬國の有色人種をどうあつかうかは，わかりきったことである。

いずれにせよ，アメリカで南北戰爭の課題が片ずいていないことは，いまはアメリカだけの問題でなく，世界の人民の問題であり，とくにわれわれ日本人の切實の問題でもある。われわれは，アメリカ占領者の基本政策と態度を本質的につかまないかぎり，それから解放されるみちがはっきりしないだろう。またアメリカ帝國主義とたたかう共同のなかまとしてのアメリカ民主主義の力とその弱點をも，充分理解する必要があるだろう。それらの角度から，アメリカのブルジョア民主革命としての南北戰爭の分析も，われわれの一つの課題になる。とくにさい近のアメリカの反動勢力が，「風と共に去りぬ」をはじめ，多くの小說や映畫をつうじて，南北戰爭の眞のすがた，とくにそのなかでのアメリカ人民の民主主義的闘いの實態をおおいかくし，我々のアメリカ民主主義にたいする正しい評價と信頼を混迷させて，我々のアメリカ人民との民主主義的な協力のみちをふさごうとしている以上は，南北戰爭の正しい分析と評價をわれわれなりにやることは，重要な意味をもつだろう。

III

そのように，アメリカ南北戰爭の歴史的研究は，ただアメリカの國がらを理解するということのためにでなく，アメリカ帝國主義からのわれわれの民族的解放という實踐的課題から出たものとして，あつかわれるべきであり，現代アメリカ社會の構造とその帝國主義政治の基本的な性質をつかみ，アメリカ民主主義の歴史的な力と弱點を理解して共同の闘いに結びつくという立場から，なされるべきだろう。

一世紀まえに，マルクスとエンゲルスは，社會の發展の一般的な內在の法則性をつかんで，唯物史觀をうちたて，資本主義社會の社會主義社會への移行の必然性と，その原動力としての階級闘爭，勞働階級の役割りと革命の戰略戰術についてまで，基本をあきらかにした。レーニンは，マルクスの學說と方法論にもとずき，新しい情

勢のなかでそれを發展させながら，ロシヤのプロレタリアートの前衛黨を組織し，その指導によってロシヤの勞働者と農民の同盟を實現して帝政をたおし，さらに社會主義革命を達成して，勞働者農民の解放を實現した。世界の資本主義國および植民地諸國も，マルクス・レーニン主義に立脚し，ソヴェト同盟にまなびながら，解放のたたかいをおしすすめ，東ヨーロッパ諸國および中國で人民の解放をもたらした。

アメリカでも同じたたかいがすすめられてきたが，反動主義者たちはアメリカの歴史の特殊性を强調し，日和見主義者もそれにならって，アメリカの人民の進むべきみちを混亂させようとしてきている。したがって，アメリカの解放勢力は，アメリカ社會の特殊性の理論，アメリカの歴史の特殊性の理論と，たたかわねばならなかった（フォスター『アメリカ合衆國共產黨史』參照）。

アメリカ社會のおこりと發展の歴史は，たしかに世界の他の諸國の歴史といちじるしくことなっている。アメリカの原住民の歴史は，ヨーロッパからの移住者征服者の社會によってたちきられ，いわゆるアメリカ合衆國の歴史は，近代の資本主義社會から直接にはじまった。したがって，合衆國の歴史には直接には古代も中世もない。その建國は，そしてブルジョア民主主義革命のさい初の局面は，舊世界の權力からの植民地の民族的獨立としてあらわれた。南北戰爭は，ブルジョア民主主義革命の第二の局面であった。だが，北部と南部との地域的な戰爭としてあらわれた南北戰爭は，とくに南部の奴隷制度とそれにもとずく權力の特殊性によって，いちじるしく他の諸國のブルジョア民主主義革命の經緯とことなっていた。

戰爭中，南北戰爭の研究をはじめるにあたって，私はつぎのように問題を設定してみたものだ（ノートから）。

1. 南北戰爭の歴史的意義——アメリカの第二次民主主義革命。

その內容は，經濟的には，前資本制的關係（奴隷制度，プランティション大土地所有制）の廢棄，國內市場の統一，產業革命の達成，アメリカ資本の商業資本の支配的段階から產業資本の支配する段階への移行，いわゆる產業資本の確立とヨーロッパ資本への植民地的從屬關係ののこりかすの廢棄。

政治的には，南部の奴隷所有貴族の寡頭獨裁權力の打倒，ブルジョア政權の確立による民主共和國としての連邦統一の完成，奴隷解放とブルジョア民主主義の完成。

イデオロギー的には，民主主義，自由主義，個人主義にもとずくアメリカ國民文化の確立。

2. アメリカ南北戰爭のブルジョア民主主義革命としての特殊性（イギリス，フランス，その他の諸國の革命とくらべて）。

i. 南北戰爭は，選擧によって平和的に政權についたブルジョアジーにたいして，舊權力の奴隷所有貴族が反動的反革命的な武裝叛亂をおこしたことからはじまった，（この點では，1930 年代のスペインの內亂と，比較され得る。スペインのばあいは，選擧によって平和的に政權についた人民戰線政府にたいして，封建的ファッショ的な反革命勢力が，ドイツ・イタリアなど外國の帝國主義ファシズムの直接の援助によって武裝叛亂をおこし，イギリス，フランスの中立政策に保障されつつ革命をおしつぶすことに成功した。もちろん，資本主義の全般的危機におけるヨーロッパの事件と，資本主義が帝國主義の段階へ移行しはじめるまえのアメリカ大陸の事件とは，世界史的に意味もことなるが，革命のシチュエィションに類似點があり，比較檢討されてよいだろう）。

ii. 南北戰爭は，社會的對立が地域的戰爭としてあらわれ，矛盾の交錯と混淆があった。そのために，他の諸國の民主主義革命とことなった展開と問題とをもった。

iii. ブルジョアジーが世界史的にその英雄的段階をすぎて，とくに 1848 年の革命ののち，パリ・コンミュンの直前であり，世界的に資本主義が帝國主義の入口に近ずいていた，（その點で，ドイツやイタリアの革命と比較される）。したがって民主主義革命の完成がブルジョアジーによってサボタージュされ，革命が不徹底におわったこと。

iv. 舊勢力が奴隷制度という特殊な經濟的社會的基礎に立っていた。

v. ブルジョア政府が上から民衆を動員して反革命と闘ったために，革命の下からの民衆戰爭としての面が，イギリス，フランス，ロシヤの革命やアメリカの獨立革命などより，あいまいであった。だから，イギリス革命の平等派やフランス革命のマラーおよびエベールチストのような，革命の前衛的な勢力がはっきりとは，あらわれなかった。南北戰爭前の奴隷制廢止論者は，むしろ宣傳團體であった。南北戰爭後の南部の再建の時期に，はじめてはっきりと，革命と反革命とのたたかいが民衆闘爭としてあらわれ，黑人と白人との革命的民主主義的同盟が革命の推進力になった。

3. そこで，南北戰爭の問題點としては——

i. 南部の武裝叛亂の根據，奴隷制度と奴隷所有權力の本質と實態，とくに南部の小農民（ヨーマンもし

くはブーアホワイト）の動向，黑人の解放鬪爭。南部の矛盾の深まり。ヨーマンについては，とくに境界諸州の階級關係とその動向。

ii. 北部の反奴隷制戰爭の推進者たち——ブルジョアジーの分析，(1850 年代の北部の工業の發達程度)，奴隷制廢止論者の階級性，勞働階級と農民の動向。北部における南部派の分析（商業資本その他)。北部の社會矛盾。

iii. 西部のうごき，西部と南部，西部と北部の關係と矛盾。とくに西部の農民の動向，役割，意義，農業の技術革命との關連。

vi. 南北戰爭と外交關係，イギリス，フランス，ロシヤ。それらの政府と國民との南北戰爭についての見方と態度。

IV

そのように，南北戰爭を世界史的な觀點でとらえようとしたとき，何よりも大きな問題は，奴隷制度とは何か，ということであった。ルイス・ハッカーは，1940 年の *Triumph of the American Capitalism* のなかで，アメリカの獨立戰爭を，イギリスの Mercantile Capitalism にたいするアメリカの Mercantile Capitalism の勝利としてつかみ，南北戰爭を，アメリカの Mercantile Capitalism にたいする Industrial Capitalism の勝利としてつかんでいる。だが，革命を，古い型の資本と新しい型の資本との鬪爭として理解することは，革命の本質を理解しないことになるだろう。なぜなら，革命は，大衆行動であり，人民大衆がいままでの生活と政治にがまんがならなくなり，それを變革しようと要求し行動することからおこる。ブルジョア民主主義革命は，資本主義以前の經濟的社會的政治的構造，社會の人間關係が，人民大衆の生活と生產の發展を阻害し，それらを破壞するにいたったとき，人民大衆が古い人間關係社會關係をうちやぶって，あたらしい，大衆の生活と生產の發展に適合した人間關係社會關係をつくり出す革命である。そのあたらしい人間關係社會關係が，いわゆるブルジョア民主主義社會であり，その基礎が資本主義生產關係である。だから資本主義は革命によって古い社會關係と政治權力から解放されるから，資本家階級は多かれ少なかれ積極的に革命に參加するだろう。だが，資本は革命が人民大衆によって徹底的におしすすめられることに不安を感じ，革命よりも自己の蓄積に全力をあげて，むしろ革命の發展をおさえることになる。

だから革命を古い型の資本と新しい型の資本との鬪爭のように理解するのは，生きた人間大衆の階級鬪爭を，見うしなわせ，人と人との關係を，物と物との關係に還元することになる。物と物との關係の背後の人と人との關係こそが，われわれのつかまねばならない對象であるのに。

とくにハッカーが，南北戰爭をアメリカの古い Mercantile Capitalism と新興の Industrial Capitalism との鬪いとしてとらえることは，一面では南北戰爭を世界史的な觀點でとらえようとする努力から生れたことであって，奴隷制度と Mercantile Capitalism との關係に新しい分析と洞察をあたえたものであろうが，他面で南北戰爭の民主主義革命としての本質を沒却することになる。ハッカーは，古い型の資本と新しい型の資本との鬪爭というモチーフにとらわれて，南部の奴隷制プランティションをも被搾取者である奴隷との關係や勞働者や農民との關係でなくて，資本との關係でのみ追求し，商業資本とむすびついたプランティション資本制度（カピタリズム）というものを想定する。それが歷史的に經營的に行きずまって，新しい產業資本にとってかわられようとしたところに，內亂がおこったということになる。南北戰爭が，アメリカ資本主義の，商業資本の支配的な時代から產業資本の支配的な時代への移行を實現したこと，南北戰爭のなかに商業資本と新興の產業資本の鬪爭の局面がふくまれていたこと，それらは事實である。だが南北戰爭の歷史的な本質は，奴隷制權力とブルジョア民主主義勢力との決戰というところにあった。奴隷制度と奴隷所有者政權が，アメリカの經濟的社會的發達の桎梏として，たえがたいものになったとき，アメリカの人民も資本主義勢力も，反奴隷制で統一して選擧によって平和的に政權にいたったのであり，その平和的な權力の移行を阻止しようとして，奴隷所有階級が反革命の武裝叛亂に立つにいたって，南北戰爭となったのである。そして，南北戰爭によって反革命の奴隷所有者權力はうちたおされ，奴隷は解放されたが，プランティション制度はのこされ，そのために元奴隷所有階級は，解放された黑人をふたたび半ば奴隷的隷從につなぎとめることができた。

そこで私は，アメリカの黑人奴隷制度とプランティション制度の發生と發展を追求し，それを，世界の資本の歷史的發生すなわち資本の本源的蓄積の過程にうまれ，その一つの局面となった近世植民地奴隷制度であると規定することができた。イギリスの重商主義資本の本源的蓄積の所產であり，その蓄積の場であったアメリカ南部のプランティション奴隷制度は，アメリカの獨立革命のときに，解決されるべきであったのに解決されなかった。それはイギリスの產業革命とむすびつくことになってアメリカの國民經濟の資本主義的發展の重大な障害となり，

とくに奴隷制度をたもつための奴隷所有階級の寡頭政治が，アメリカ人民の民主主義的自由をふみにじり，民主共和國の統一をも破壊しようとするにいたって，革命的解決以外にみちがなくなった。つまりアメリカ南部の奴隷制度は，前資本制度として，資本主義經濟および社會の發展の桎梏となり，その點では他の諸國の封建制度，絶對主義などと同じ役割をなし，ブルジョア民主主義革命としての南北戰爭によってうち倒されねばならなかった。

私は，南北戰爭の研究にあたって，それらの點の解明に努力した。だからまず，1. アメリカの奴隷制度とは何か，という問題からはじめ，2. 第一次ブルジョア民主主義革命としての獨立革命は，なぜ南部の植民地奴隷制度を解決できなかったか，3. 近代的民主共和國の內部にどうして植民地奴隷制度が發達できたか，4. 南部の奴隷制度はアメリカ社會の近代化と資本主義的發達をいかにさまたげたか，というふうに問題をすすめた。そして南北戰爭の勃發までの情勢の分析のなかで，歴史的に否定されようとするおくれた制度の南部奴隷制度が，どんなに經濟的，社會的，政治的に自己矛盾におち入ったか，その自己の內部の矛盾を克服しようとして，「歴史的におくれた奴隷所有權力は，どんな惡あがきをしたか，それがあがけばあがくほど自己の矛盾を大きくし，自分の足場をほりくずし，ますます國民を反奴隷制の統一戰線に結集させて行った，それらの經緯を明かにしようと努めた。（拙著『アメリカの黑人奴隷制度と南北戰爭』）

南北戰爭の過程の分析では，リンカーンの代表した平和的方法と，ジョン・ブラウンの代表した革命的方法とを對比して檢討し，奴隷制度の廢止が平和的方法では可能でなかった事實をときあかそうとした。ジョン・ブラウンの革命的方法の內容は，きわめて大きな示唆をふくんでいる。そこには，ただ平和的方法にたいする革命的方法の歴史的な必然性と正當性の問題があるだけでなく，革命の戰略戰術について，黑人と白人の勤勞階級の民主主義的革命的同盟の方式が出されていることが，歴史的に重要であると思われる。ジョン・ブラウンを氣ちがいあつかいにしがちなアメリカのブルジョア史家の歪曲から，ブラウンの思想と方法と行動の眞のすがたを救い出すことは，大切なことである。それは，南北戰爭中の南部および境界州の，黑人および白人貧農の民主主義的鬪爭と同盟，南部の再建の鬪爭の過程の，黑人解放民と白人勤勞民との革命的民主主義的同盟に發展するものであった。そこに，南北戰爭の歴史的課題の眞の解決のみちが示唆された。たがこの黑人白人勤勞民の革命的民主主義的同盟は勞働階級の指導を得ることができず，失敗した。1848年のヨーロッパ諸國の革命の鎭壓以來，ドイツ革命，フランス革命からの亡命者が，多ぜいアメリカに移住し，マルクスとエンゲルスの思想も新大陸にもたらされたが，アメリカの勞働階級は歴史的にまだブルジョア民主主義革命の指導者になるまでに成熟していなかったのだ。そのために，南北戰爭の指導はリンカーンを代表者とするブルジョアジーによって行われ，すぐれたブルジョア政治家としてのリンカーンの誠實と努力にもかかわらず，指導はつねに動搖しつずけ，戰爭の過程に巨大な利潤かくとくの機會を見出したブルジョアジーは，やがて革命の遂行よりも自己の蓄積に熱中し，そのために內戰は必要以上に長期化してしまった。そこにアメリカのブルジョア民主主義革命の，ブルジョア的本質があった。この南北戰爭の經過中のマルクスとエンゲルスの時局および戰局批判ほど興味ふかいものは少い。マルクスとエンゲルスは，ヨーロッパにあって，アメリカの南北戰爭の推移に世界の勞働階級および被抑壓階級の解放鬪爭の指導者としての深い關心を寄せ，その透徹した辯證法的唯物論をもって戰局を分析し，見とおしをたて，『ニューヨーク・トリビューン』紙に寄稿してアメリカ人民にきわめて適切な助言を與えている。ことにマルクスの情勢分析と見とおしの正しさは，神のごときものがある。それはとにかく，內戰中のブルジョア左派，いわゆる共和黨急進派（スティヴンス，サムナーら）の革命的手段のための努力は，南北戰爭のとくに重要な局面をなすものであった。リンカーン政府のほとんどすべての革命的手段は，急進派の政治的壓力によるものであった。この急進派が，黑人白人勤勞者の革命的民主主義的同盟とむすびついて，南部の反革命と鬪う南部の再建期は，ある意味では南北戰爭そのものよりも重大であった。

そして南北戰爭と南部の再建期に，ブルジア民主主義勢力が反革命をてってい的にうちたおすことができず，奴隷判度を廢止しながらプランテイション大土地所有制をのこして，黑人をふたたびさまざまな人種差別制度によって半奴隷制的な隷農としてプランテイション大經營につなぎとめることになったことは，その後のアメリカ社會，アメリカ史に問題をのこし，現代もアメリカの經濟，社會，政治に大きな禍根となっているのである。そのことについては，この文のはじめにも見たところである。したがって，南北戰爭の歴史の研究は，南北戰爭だけにとどめられるべきでなく，現代のアメリカの前資本制遺制としての南部のプランティション制度の實態と意義，アメリカの黑人問題とブルジョア民主主義の危機，アメリカのファシズムの特質の追求などにも，のばされねばならないだろう。いやむしろ，後者の研究の前提として，南北戰爭の研究が行われるべきであろう。